カンキツそうか病について

果樹試験場　近藤知弥

今月は、露地カンキツで問題となる「そうか病」について、被害や発生生態、対策等について説明します。本病は苗・若木で発生が多い病害であり、特に温州ミカンは本病に弱いため、近年、改植事業等により樹の更新を行っている圃場では、油断しているといつの間にか多発生する可能性があります。

本病はこれから先の春期の防除が特に重要となるので、きちんと防除を行いましょう。

―被害―

本病は葉や果実、枝に発生する病害で、感染する時期によって病徴が異なります。葉や果実の組織が若い時期（葉：長さ約５㎝まで、果径：４～10㎝まで）に感染すると「いぼ型病斑」に、それ以降に感染すると「そうか型病斑」になります。病斑が多く発生すると、葉では奇形や落葉、果実では肥大阻害、早期落果、品質低下を引き起こします。苗木や樹齢の若い樹（樹齢 10 年生くらいまで）で多発生しやすく、樹齢を経るにしたがって発生しにくくなりますが、油断は大敵です。

写真　葉の病斑（いぼ型）

写真　果実の病斑（そうか型）

―病原菌の生態―

病原菌は糸状菌（病原菌名：*Elsinoë fawcettii* ）で、葉や枝の病斑で越冬します。越冬した病斑では、①気温 10～28℃(適温は 20～24℃)、②濡れが３時間くらい続くと胞子が作られ始めます。胞子は雨滴等で若い葉や果実に運ばれ、感染します。葉では、感染すると最短で約５日ほどの潜伏期間（温度 20～26℃）を経て発病します。果実では、葉に比べて潜伏期間はやや長く、好条件で 10～15 日くらいです。そして、新しくできた病斑でも胞子は次々と作られ、他の若い葉や果実に二次感染を行い、被害が拡大します。

葉、果実ともに若い時が最も発病しやすく、生育が進むと発病しにくくなります。通常

では、春葉で 6 月上旬頃以降、果実で 9 月上旬頃以降になると新たな発病はみられなくなります。ただし、夏枝や秋枝の若い時にも感染するため、夏季以降の発病にも注意が必要です。

―防除対策―

・耕種的防除

新植園、改植園では、本病が発病していない苗木を定植しましょう。また、定植後～若木の間は発病しやすいので、防除をきちんと行いましょう。なお、窒素肥料が多いと枝が遅伸びして発病しやすくなるので、適切な施肥を心掛けます。すでに発病が見られる園では、剪定の際に病斑がある枝葉を可能な限り取り除き、菌密度を減らしましょう。

菌は傷口からも感染するため、防風樹の整備等を行って傷等を減らしましょう。

・薬剤防除法

薬剤防除は、展葉初期と開花期前後が重要な防除時期です。

〇4 月上・中旬の防除～展葉初期～

新葉の展葉初期（最も伸びた新梢が 1 cm 程度の時期）が防除適期です。デランフロアブル 1,000 倍を散布しましょう。展葉初期であればマシン油との混用も可能なので、ハダニが発生している園ではマシン油乳剤 200 倍を混用してください。

ただし、かぶれの問題などでデランフロアブルを使いたくない場合は、ストロビードライフロアブルを散布します。単剤散布の場合は 2,000 倍で、マシン油乳剤 200 倍を混用する場合は 3,000 倍で散布してください。

〇開花期前後の防除～特に落弁期～

開花期前後はそうか病だけではなく、灰色かび病、黒点病の防除時期でもあります。特に落弁期はそうか病の重要な防除時期なので、必ず防除を行ってください。３病害を同時防除する場合は、フロンサイド SC、ストロビードライフロアブル、ナリア WDG、ファンタジスタ顆粒水和剤、フルーツセイバー、ナティーボフロアブル等で防除を行います。特に黒点病の防除を強化したい場合は、エムダイファー水和剤等を加用してください。

新植園、改植園、密植園、北面の傾斜地や谷間にある園、風当たりの強い園では、そうか病の発生が多いので、満開期や落弁期に当たる時期に防除を行いましょう。

そうか病は多発生させると防除が困難になるとともに、翌年にも持ち越してしまいます。新葉の展開初期、落弁期に適期防除を行えば問題となることは少ないため、適期防除をきちんと行いましょう。